

幼児の教育課程・保育計画・指導計画〔試論〕

—指導計画の役割・機能を考える—

松 村 和 子*

Abstract

This paper analyzed students' observational reports which included their impressions and experiences gained from their teaching practice at nursery schools. Despite lack of opportunity to expose actual curricula at schools, the students have found the very essence of curricula. The followings are 6 major roles classified in their reports and the 7th point to be added to enrich prospective role of curricula.

Roles of curriculum should be:

1. A long term grand design starting from enrollment and ending at graduation.
2. Interactive and circulative through setting a hypothesis, implementing it, and reflecting the result.
3. Functioned as a time table
4. Framed for setting classroom environment and preparation.
5. Responsive to the needs of parents under the shared understanding with team teaching staff.
6. A record of teachers' professional development.
7. A record of each child's development of learning

Key Words: designing curriculum, nursery school, role of curriculum, team teaching, professional development

An essay on the role and function of planning curriculum for children

*Kazuko Matsumura

Correspondence Address: Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 27, 2004.

Published December 20, 2004.

はじめに

従来「教育課程＝カリキュラム」とは、学校教育において編成されるものであり、学校教育体系に属する幼稚園では、「教育課程＝カリキュラム」は必ず編成され、指導計画も作成されることになっている。そして特に私立幼稚園では、公教育としての責務や園児募集のためにも園の教育方針や保育方法を示すものとして教育課程や指導計画を地域や保護者に公開し、積極的に園の保育について情報開示をする努力が見受けられる。一方同じ幼児の保育・教育機関である保育所では、教育課程に代わるものとして入園から修了までの在園期間にわたる保育・教育の大まかな流れを「保育計画」という言葉で表し、その具体的なものを指導計画と呼んでいるが、入所が措置であったことから、さほど積極的に情報開示としての保育計画や指導計画の公開は必要とされなかった。しかし、保育所入所が措置だけではなく自由契約になったり、施設そのものが幼稚園との一体化や幼稚園と保育所の両方の機能を併せ持つ総合の施設になったりすると、保護者や地域に園の保育について積極的に園の情報を開示する必要性が生じ、保育計画やその時々⁽¹⁾の指導計画を提示することなどが求められるようになると思われる。保育者養成校としても保育計画や指導計画の作成の知識と実践力を持ち、長期的な見通しの中で教育的活動を行える保育士を育成することが急務となる。つまり、幼稚園であろうと保育所であろうと、幼児を保育し、教育していく保育職に就くものとして、教育課程および保育計画とそれらの具体案である指導計画についてその作成の必要性や意味するものを正しく理解し、使いこなしていくことが求められる。保育所保育の特色にあわせた保育計画・指導計画は従来の幼稚園＝学校の教育課程や指導計画と同じであってよいのだろうか？

今までのカリキュラム研究では、その内容については宍戸健夫が解説しているように久保田浩や安部富士男の構造論がある。この研究では、保育所保育にも役立つような教育課程・保育計画・指導計画のあり方を探るために、はじめに、指導計画の持つ役割や機能について、初めての保育実習を行った学生の現場での経験を手がかりにして、考えていきたい。

I 研究の目的

保育計画の具体案である指導計画の持つ役割・機能について、保育所における初めての保育実習を行った学生の現場での経験を元に分析・考察する。

II 研究の方法と検討内容

1. 保育学科3年生へのアンケート調査

2004年度「幼児教育課程総論」履修者のうち2年次に初回保育所実習を履修済みの学生のみ 136名、2004年4月19日実施

2. 研究の内容

学生の実習後の感想（アンケート）を筆者の担当する「幼児教育課程総論」の授業と関連させて、次の4点について検討した。

- 1) 筆者の考える「教育課程・保育計画・指導計画」に対するイメージと学生が実習で得てきたそのイメージがどのように違っているのか。つまり、理論と現実のずれについての検討。
- 2) 保育実習中に指導計画と実践との相互作用、循環システムの理解は得られているかについての検討。
- 3) 指導計画の必要性について学生はどう考えているかについての検討。
- 4) 「教育課程・保育計画・指導計画」の役割・機能を構造化して考える。

III 研究の結果と考察

1. 筆者の考える「教育課程・保育計画・指導計画」に対するイメージと学生が初めての保育実習で得てきたそのイメージがどのように違っているのか。

アンケートから「教育課程・保育計画・指導計画」といったときに、筆者の理論に対する教科書的な理解⁽²⁾と学生の保育実習における現場経験からの理解にはイメージするものにずれがあるのではないかと考えられる。なぜ、このようなずれが生じるかという点について次のような原因が考えられる。

- ① 指導計画そのものを現場で見えていない
- ② 行事予定表や日課表を指導計画だと思っている
- ③ 指導計画作成のプロセスを見ていないので、子どもの実態と計画の関連がつかめない

まずはじめの原因であるが、表1に示すように、2年次2月に保育所実習に行った学生たちに、「実習中に『保育のねらい、時間、活動の流れなどが書いてある』指導計画を見せていただいたか」と尋ねたところ、実にその半数が「見ていない」と答えたことに現れている。この中には、直接に見せてはもらっていないが、壁に貼ってある日課表を見たか答えているものも

含まれている。このことは、半数もの学生がその日、その週にどのような意図を持って保育が行われるのか知らないまま、保育の場にいたということである。これは、保育所の実習であったため、乳児のクラスに配属された学生は、指導計画というより個人別の発達を記したものや、食事・睡眠・排泄といった生活の日課表を見せてもらったという事情もあることが影響しているかもしれない。

第2の原因については、「見せてもらった」という回答者には、保育のねらいが書いてあるものという条件で日案、週案、月案などを選んでもらったが、ほとんど毎日同じ日案や保護者に渡す入園のしおりに書いてあるデイリープログラム(日課表)、事務室の壁に貼ってあるその月の行事予定表などを「(指導計画を)見た」として、回答しているものがあるということから推察できる。つまり、見せてもらったという学生の中でもこれら日課表や行事予定表、または行事のための段取り表を「保育計画(教育課程)や指導計画」だと思っている可能性が考えられる。これらは保育のねらいが一応書いてあるかもしれないが、いわゆるスケジュール表であって、筆者が「教育課程・保育計画・指導計画」のイメージとして持つ「目の前にいる子どもたちの発達の道筋としての保育者の見通し」があつての活動や計画とはずれがある。これは、従来の「教育課程=カリキュラム」の考え方が幼稚園、すなわち学校としてのそれであるからであろうか。保育所は、もっと緩やかな、生活全体を通しての全人格的な発達を目指していて、狭義の「教育」を考えていないから日課表になるのだともいえる。原因の1と2は、保育所ならではの保育のあり方にふさわしい「教育課程・保育計画・指導計画」を考えなくてはならないという示唆でもあろう。

第3の原因は、現場で見る週案や日案といった指導計画は学生としてはすでに出来上がったものを見るので、保育士がなぜそういう活動を用意しているのか、子どもの姿と今日の活動はどう結びつくのかという保育者の今までの子どもの姿の読み取りや作成中の試行錯誤は見えにくい。むしろ、日案は保育士の考えた活動をどのように子どもにさせていくのかという手順書と理解される恐れがある。確かに日案レベルの指導計画では、その日の保育の時間の流れや手順などの段取りや保育者の覚書のようになる場合が多い。よって、学生としては、指導計画とは保育者の考えた活動を子どもたちにどうさせるかという計画であるというイメージを持つ危険が生ずるのである。これは、幼稚園実習でも考えられる経験である。

今まで「幼児教育課程総論」の授業では、保育所を視界に入れての講義であっても「教育課程=カリキュラム」がもともと学校である幼稚園を前提に組み立てられているため、保育所の特色を十分に吟味しての授業展開にはなっていなかったということが反省される。このアンケートに見るように、「実習中に指導計画を見ていない、あるいは、行事予定や日課表は見た」という学生に、いくら教育課程・保育計画・指導計画の理論的背景を教科書的に述べてもそれは、実際の体験とは結びつかず、「堅苦しい」「難しそう」「面倒だ」と感じさせてしまう一因になるのではないかと考えられる。

特に、第2、第3の原因に見られるように、指導計画の持つスケジュール管理や段取り表と

しての機能が強調されるのは、現場では毎日の目の前の保育をどう展開するかが差し迫っての大事であるからである。が、その機能を発揮するためのバックボーンとしての本来の「教育課程・保育計画・指導計画」の考え方、理論が大切なのであって、そこを保育所の保育にも当てはまるように捉え直すことが必要となろう。学生は、2年次までに保育内容の各領域の内容やもちろん実習の事前指導において、部分実習などの指導計画（指導案）の作成には触れており、学生は初回実習でも部分実習の指導案を書く場合もある。たとえば、帰りの会で紙芝居をどう読むかというように、たとえ、その活動のねらいを含めたとしても実質的には自分の考えた活動をどう滞りなく進めるかの手順書を書くことになるだろう。つまり、指導計画の持つ一つの機能である「段取り表、あるいはスケジュール表」という側面が強調されての理解となる。しかし、本来の指導計画というのは、「今の子どもの姿から次へ進むための経験を用意する」ために作成するという視野の広いきざまな場面での保育を総合して、今日の活動を計画していくランドデザインとしてあるのだが、その点の理解が難しいところである。もちろん初回実習であるので、実習のねらいそのものが指導計画の理解・作成という点ではなく、保育者の仕事や子どもの発達の観察といった保育の現場を知るという基本的なものであることは当然である。しかし、いうまでもないが、指導計画は子どもの今の姿から未来へ向かっての育ちの見取り図であって、その中で、どのような活動を持ってくれば、つまりどのような環境を設定すれば、その見取り図が展開できるかということを考えるものである。保育者がこの活動をさせたいからこういう手順ですれば、無理がないだろうという考えではないのである。保育所では、6年間という長いスパンで、子どもの全人格的発達を支援するという特色を考えると、このタイムスケジュール的な指導計画の理解ではなく、ランドデザインを描いた上での「今日の保育」であることを理解したい。

2. 保育実習中に指導計画と実践との相互作用、循環システムの理解は得られているか

次に、実習中にどのようにして活動の流れを知ったかについて質問すると、表2で明らかのように何らかの“指導計画”を見た学生も、見ていない学生も実に90%以上が、保育中にそのつど担任から指示をされて、あるいは、担任が子どもたちに呼びかけるのを聞いて子どもと同じように行動したと答えている。興味深いことにこの質問で「指導計画を見ていない」という学生のほうが、次に何をするのかわからない危機感からか「自分から進んで一日の計画を聞いて全体像をつかもうとする」傾向が読み取れた。もちろん日案をあらかじめ見ていたとしても、実習生は流れがのみ込めず、活動の節目節目で、担任保育士から指示を受けるだろうことは想像に難くない。また初回実習という特殊性を鑑みても、つまり現場の保育を知る、子どもたちの発達や活動の様子を知る、保育士の役割を知るということが実習の大きな目的となるということを経験したとしても、この実習体験からは保育士が子どもの姿を読み取り、意図を持って活動を組み立てているという展開は汲み取りにくいであろうと推察される。学生たちが初めての保育現場で、子どもと一緒に保育を体験している姿が目には浮かぶようである。それはそ

れで新鮮であり、子どもの生の姿を知り、保育者としてかかわることの楽しさや難しさを感じるといふ初回実習ならではの初々しい感想となって出てくるのであろう。しかし、後述するように、そのような体験をした学生からは「一日をなんとなく過ごしてしまった」といふ実習に行つてこれでよかったのかといふ反省が聞かれることも現実には起こり得る。

指導計画とは、子どもの実態から始まり、仮説としての計画とその実践があり、その後の振り返りによって次の日の保育の計画が立てられるといふ実践との相互作用で生まれるものであり、循環しながら進んでいくものである。この点において、この実習における「担任にそのつど指示されて、または子どもと同じように動く」といふ体験では、この指導計画と実践との関係がつかめないままになってしまう。初回実習での限界があることは承知の上であるが、指導計画があくまで、現実の子どもの姿から計画され、実践してみても、また変化していくものであることを経験してほしいと考える。

3. 指導計画の必要性の認識について

さらに「指導計画は必要かどうか」といふ質問には、全員が必要であると回答している。このアンケートは、「幼児教育課程総論」の第1回目の授業中に行われたものであるため、学生たちは、まだ、「教育課程・保育計画・指導計画」について、系統的には学んでいない。しかし、「なぜ必要だと思うか」と自由記述でその理由を尋ねると、表3のようなさまざまな理由が挙げられた。多くは、複数の理由を挙げている。これは、2年次2月の保育所実習での自分の体験を踏まえ考えられたものであろう。それらを以下のように6つに分類し学生の気づきを抽出した。(表3 学生の記述した理由はほぼ原文のまま。()内の数字は、その項目を挙げた学生が2人以上の場合の人数。)自由記述にしたので、「もし指導計画がなかったとしたら……」と仮定したらどうなるかといふ視点からの回答もあったので、同じく表4に分類し、考察する。

理由1. 発達を見通した上でのつながりのある計画が必要である。(表3-1))

学生の気づき——保育所保育は、プロとしての保育士が保育するところであつて、発達を保障する場として長いスパンで子どもの発達を捉えようとしている。子どもに育つものを捉えるためにも必要と考えている。

理由2. 保育にはねらいのある活動が必要である。(表3-2))

学生の気づき——保育の内容が偏らないよう、またはどのような経験を用意するのかといふ保育者側のねらいを持つことの大切さを感じている。保育所保育は単なる託児や預かりではなく、保育士の意図した活動を計画しているものであるといふことの自覚が芽生えている。

理由3. スケジュール管理、段取り表として必要である。(表3-3))

学生の気づき——1年の単位で行事を考えるにしても一日の単位で活動を用意するにも、

時間の枠組みは必ず必要なものであり、流されたり、余裕がなくなったりすることを避けるためにも指導計画は必要だと考えている。また、計画をしているからこそ、臨機応変にその変更をすることができるとも感じている。

理由4. 準備や環境設定のために必要である。(表3-4))

学生の気づき——指導計画が、保育士の考えた活動を順序良くさせるための計画表ではなく、子どもたちが必要な経験をするためにどのような環境を用意し、配慮すれば良いかを考えるために必要だと捉えている。

理由5. チーム保育のために必要である。(表3-5))

学生の気づき——保育所には、早番、遅番などのシフト、または非常勤の保育士、あるいは給食調理員や実習生などさまざまな立場の人が保育にかかわっている。その人たちをつなぐもの、共通理解の元となるのが指導計画である。この感覚は現場に出てこそ得られたものではないだろうか。また、保護者への開示も示唆している記述があるのは初回実習を終えたばかりのものとしての気づきとして特記すべきことである。

理由6. 専門職としての自己研鑽・発展のために必要である。(表3-6))

学生の気づき——初回実習をした学生としてこの点に言及しているということは、実習を担当した現場の保育士からの学習の成果だと思われる。国家資格としての保育士が自信と誇りを持ってプロとして仕事をしていくために、自らを研鑽していく姿勢が、指導計画の中に立ち現れてくることへの期待が見て取れる。

これ以外に学生の中には、逆にもし「教育課程・保育計画・指導計画」がなかったらと自分で仮定して書いているものもあった(表4)。

表3、及び表4に見るように、これら学生の挙げた理由の中には、驚くほど「教育課程・保育計画・指導計画」の本質を突いているものがある。これらの理由を挙げたのは、現場の実習で実際に間近に保育士の仕事を観察したことから専門職としての保育のあり方を自分なりに考えたものであろう。表4の「もし指導計画がなかったら」と仮定しての学生の意見では、表4で挙げられた理由5(チーム保育、保護者への言及)と理由6(自己研鑽への期待)が出てきていない。これは、「もしなかったらこんなことが困るだろう」と自分を中心に目の前の保育場面を思い浮かべて考えるので、周りの保育者の姿や保育後の反省・振り返りまで視野が広がらなかったと思われる。また表4の理由1)から理由4)も表3に比べて表層的な意見に留まっており、「指導計画がなかったら困る」という表面的な理解であろう。このことから単に「もしなかったらどうか」ということから「なぜ必要なのだろう」というように考えを進めることによって、本質に迫ることができるのではないかと思われる。

4. 「教育課程・保育計画・指導計画」の役割・機能の構造化

さて、学生たちは、これらの理由を挙げることで、「教育課程・保育計画・指導計画」の役割・機能についても考えをめぐらしていることが推察される。学生が現場に出て、無意識のうちにつきま取ってきた印象をこれからの保育所において求められる指導計画の役割・機能への気づきとして構造化することによって、保育所保育の特色を生かしながら、指導計画を書いていくことができるのではないかと考える。それらを次のように3. で挙げた学生の「指導計画を必要とする理由」と対応して構造的に捉えてみよう。そして、学生からはあがってこなかったが、もう1点の役割・機能を7番目として付け加えたい。

(1) 理由1と対応して——発達の見通しをつける

・発達のグランドデザインとして入所から修了まで長期にわたる計画であること。

岸井(2003)⁽³⁾は、教育課程を表す英語のカリキュラム (curriculum) の語源について、ラテン語で古代の競馬の走路を意味し、通るべき一定の走路という意味であり、家庭教育にはカリキュラムがなく、系統的・組織的な教育の場で必要なものであると述べている。このようにカリキュラムという言葉は、どうしても小学校以上の教科教育に見る学習内容の段階的な配置というイメージを与えるので、就学前の保育の場において、この言葉をそのままを使うと、保育者が子どもに必要な経験をあらかじめ順序良く配置したものという改定前の幼稚園教育要領の考え方に戻ってしまう恐れがある。幼稚園における教育課程は、「環境を通しての教育」という点からそれぞれの園で入園から修了までにどんな風に教育を進めていくかを表すものであり、神長(2004)⁽⁴⁾は「目指す子ども像(教育目標)、育てたい方向(具体的なねらい)やそのために子どもが積み重ねていく経験、すなわち、保育者が指導する内容(具体的な内容)を示したもの」と述べている。つまり、幼稚園でも、保育所でもその園によって目指す子どもの像や育てたい方向は同じでも、その年の子どもたちによって積み重ねていく経験は違うことが予想されるということである。磯辺(2003)⁽⁵⁾は、レッジョ・エミリアの保育実践を紹介しながら「カリキュラムをデザインする」という言葉を使用して、子どもたちの活動を仔細に検討しつつ、どの方向へ行こうとしているのか仮説を立てて次の学びへの援助を考えるプロセスを「デザイン」と述べている。保育所の保育計画は、入所から修了までの6年間の大まかな方向性を示すものであり、それは発達のグランドデザインともいえるべきものである。そして、各年の、各学期のというような長期の、または短期の指導計画が、子どもの実態に合わせてその時々々にデザインされるべきものである。よって、この指導計画は、保育計画(教育課程)を細かく裁断して、時系列に沿って並べたものでなく、このグランドデザインに沿って、それぞれの年の子どもの特色、保育士の個性、保育環境の開拓といったことをもとにして具体的な活動として生活全体をデザインしていくことになる。

現場ですぐ使える保育技術としての指導計画の作成技術を身につけるのではなく、保育所としての特色ある幼児の教育機関として、子どもを理解した上でどのようなねらいを持って保育を組み立てていくかということが見えなければならぬと考える。保育士は、その保育所の

入所から修了までの全期間の保育計画を通して、自分なりの保育観や子ども観を持って幼児のための指導計画を作成するために理論的なバックボーンを学習することが大事である。

(2) 理由2と対応して——保育にねらいを持つ

・集団としてプロが保育する意図的な営みであり、仮説としての計画と実践との相互作用であること。

前述したように、日々の保育はグランドデザインとしての保育計画に基づく保育士の意図的な環境設定や準備、配慮のある計画された活動である。しかし、これらはあくまで前日の子どもの姿からの仮説であり、この計画のままを実現しようとする子どもの実態を無視した単なる強制の保育になってしまう。しかし、意図的な活動といっても子どもを集団として捉え、保育士の考えた活動を一齐に指導するといった活動ではなく、ましてや教育と称したある種の文字や数の早期教育や音楽・語学の特別教育といった類のものでもない。平山(1997)⁽⁶⁾は、「指導計画は事前に仮説として立てたものを実践の中で検討しながら修正を加えていく性質のもの」と捉えている。この仮説—実践—振り返りという計画と実践との相互作用、そして循環作用を指導計画の連続の中で捉えられるようにしていくことが必要である。磯部もレッジョ・エミリアの実践の中に「仮説」という言葉を見出している。

(3) 理由3と対応して——タイムスケジュールとして

・スケジュール、段取りとしての機能の重要性の再認識。

(4) 理由4と対応して——環境設定・準備のために

・援助の計画、環境の計画であることの発見。

(5) 理由5と対応して——保育者チームや実習生、保護者にも伝えられるように

・チーム保育を支える指導計画の必要性和、情報開示への気づき。

保育の場は一人の担任だけで成り立っているのではなく、学生が実際に体験してきたように多くの人々がかかわって成り立っている。そのときに今日の保育の共通理解のベースになるもの、また去年の保育からのつながりなどを知るときなど、書かれたものとしての指導計画は必須である。たとえば、一年一度の行事の取り組みについても去年はどのようなことをねらいとして活動を展開したのかを見ることができれば、担任チームが変わったとしてもその上に積み上げるべき活動の方向性が見えてくるであろう。よって、指導計画は、現在の保育者チームとしても必要であり、また子どもたちの去年、そして来年への活動の道筋としても必要である。このことは、筆者の幼稚園における指導計画の研究において、去年の保育者チームの活動経験と反省を踏まえて、今年度の計画を立てていることから明らかである(松村, 2002)⁽⁷⁾。

また、図らずも学生が指摘しているように、これからの保育所はその保育内容の情報開示が迫られ、指導計画を保護者に公開することも求められるであろう。そして、それを元に園と保護者の連携が図られていくことが予想される。指導計画は保護者が園の保育を理解するための手立てにもなりうるのである。福祉サービスの第三者評価が行われるようになったが、全国保育士養成協議会の保育所における第三者評価基準(平成14年)⁽⁸⁾の第一番目は保育計画と指導計

画についてであり、指導計画そのものについても定期的な評価を行っているかどうかをチェックするものである。このような視点からも指導計画を見直すことが必要である。

(6) 理由6と対応して——反省・評価と次の日に生かすこと

・専門職としての成長のための指導計画であること。

指導計画を書くという行為に含まれるもうひとつの意味は、自分自身の保育者としての成長を支えるものであるということである。指導計画を書く際には、必ず自分の保育実践を振り返ることになる。なぜこのときこうしたのだろうか、この環境は適切だったのだろうかと省察しながら、次の日の指導計画を書くであろう。このことの積み重ねが、記録として残り、自分の専門性の向上の足跡となっていく。目に見える形で自分の試行錯誤を振り返ることができる。このことで課題意識を持つことができることは学生も指摘しているとおりである。保育士は、一度資格を取るとその先は自らが研修していくことが求められる。日本保育協会が専門性の向上のために「生涯学習プラン」を設置した(保育とカリキュラム2004年11月号)⁽⁹⁾が、このことは国家資格としての保育士の研修の必要性を認識してのことである。日々の保育実践の中にもその意識を持つことが大事である。

(7) 一人ひとりの子どもの学びの軌跡が見える指導計画であること

筆者の行った幼稚園での指導計画の一連の研究(松村, 2001~2004)⁽¹⁰⁾で、長期および短期の指導計画の特質を分析すると週案と呼ばれるものが、子どもの経験を振り返るとき、一番その流れが見えることに気づいた。保育者としての自己の成長も記録できるが、子どもたちの得た経験(学び)の軌跡も見えるような指導計画であると、保護者への開示にも耐えられるものとなるであろう。

まとめ

今回の研究を通して、学生の実習経験と一概にいても「経験が浅いこと＝よく知らないこと」ということではなく、浅い経験の中にも現場実習の持つ意味は大きく、本質を無意識のうちにつかんできていることが明らかになった。たとえば、「指導計画を見ていない」という多くの学生がそのことを含めた実習の総体の中で指導計画のありようの本質に迫る気づきを得ていることには驚かざるを得ない。保育所で保育士と子どもたちが織り成す生活の中で、構造化して取り出すならば、3, 4, 5で分析したような指導計画の持つ役割や機能の本質が基盤として流れているからであろう。逆にいえば、毎日の生活の中で、無意識の中に埋もれているこうした役割や機能を「指導計画を書く」という目に見える形にして、保育者チームや保護者と共有していくことがこれからの保育で望まれることではないだろうか。その力量を備えた保育士を養成することが養成校としての責務であると考えられる。

(注)

- (1) 宍戸健夫 保育学の過去・現在・未来—保育カリキュラムを中心に— 保育学研究 日本保育学会 2001年
- (2) 岸井勇雄 教育課程総論 同文書院 2003年
- (3) 同上 p24
- (4) 神長美津子 保育の基本と環境の構成 ひかりのくに p45, 2004年
- (5) 磯部裕子 教育課程の理論 萌文書林 p142, 2003年
- (6) 平山許江 幼児教育・保育原理 角尾和子編著 p155, 1997年
- (7) 松村和子 指導計画を子どもの遊びに実践化する 日本保育学会発表論文 2001～2004年
- (8) HYK福祉サービス評価機関評価調査者養成研修 児童福祉施設・福祉サービスの第三者評価基準 全国保育士養成協議会 現代保育研究所 平成14年
- (9) 保育とカリキュラム ひかりのくに 2004年11月号
- (10) 松村和子 前出

附 学生へのアンケートの結果

表1 実習中に次のものを見せていただきましたか。見せていただいたものに○をつけてください

指導計画を見たかどうか	見たもの(保育のねらいが書いてあるもの)	人数	備考
見た 63人	日案	18人	保護者に配る入所案内の日課表なども含む。食事、排泄などの個人表も含む。毎日同じ日案も含む
	週案	20人	
	月案	12人	
	1年の計画	3人	
	日・週・月など複数を見た	10人	
見せてもらっていない 73人		73人	直接見せてもらっていないが、保育室や事務室の壁に貼ってある行事予定表や日課表を見た、クラス便りを読んだなども含む。

表2 実習中どのようにして活動の流れを知りましたか？

	何らかの指導計画を見た	見ていない	備考
一日の計画表があり、予めわかっていた	4人(6%)	7人(9%)	壁に貼ってあったものを見た、自分から尋ねた
そのつど担任から聞いた	24人	32人 約91%	
子どもと同じように動いた	19人		
そのつど担任から聞き、子どもと同じように動く	16人		
合計	63人	73人	

表3 指導計画はなぜ必要だと思うか

学生の意見	<p>発達の目安になる(2)。発達に合わせた活動にする(3)。発達を促すことができる。前の日からの流れがわかる、次の日へのつながりができる。どう育てるのかの計画だから。発達を支援する上で、目標を持って保育を行うことで、意識や観察も深くなる。考えながら保育ができる。1日・1週間どう過ごすといいか考えられる。次の見通しが立つ(9)。</p> <p>⇒ 理由 1) 発達の見通しをつけるために必要</p>
学生の意見	<p>ねらいを持った活動ができる。保育には、ねらいが必要。ねらいをはっきりさせるため(8)。ねらいを達成するために順を追って計画することができる(4)。どのような経験をさせたいかを考える上で必要。ねらいが明確だと余裕が出る。予定があったほうがいろいろ経験できる(7)。内容が濃くなる(2)。子どもにとって意味のある活動になる(3)。活動が偏らない(3)。ねらいを達成して、充実感がある。</p> <p>⇒ 理由 2) 保育にはねらいが必要である</p>

学生の意見	大まかな流れだけでもあると動きやすい(7)。スムーズに活動でき、ゆとりを持てる(20)。時間配分ができる(5)。効率的に動ける(2)。ばたばたしないで、落ち着いてできる(3)。メリハリをつける(9)。何をするか明確になる。生活リズムができる(3)。けじめが必要。計画しておく、天候や都合によって計画を変更できる。行事を立てやすい。
⇒ 理由 3) タイムスケジュールとして必要	
学生の意見	前もって準備ができる(17)。環境構成が必要だから(2)。適切な援助ができる(2)。予想して対応できる。配慮(3)、留意点がわかる。もしものときの備えができる。何かあったときの対処も早い。安全を考えられる(3)。
⇒ 理由 4) 準備や環境設定のために必要	
学生の意見	複数の保育士がお互いに理解できる(18)。担任以外の保育者、実習生、保護者なども知ることができる。保育者間で分担できる(3)。
⇒ 理由 5) チーム保育のために必要	
学生の意見	書面に残すことで、記録となる。資料となる。反省の材料となる。後から反省、振り返りができる。計画表としてまとめると自覚がでる。計画があると次への課題も見つかる。
⇒ 理由 6) 専門職としての自己研鑽・発展につながる	

表4 もし指導計画がなかったとしたら

学生の意見	子どもに何が育つかわからない。平凡な日々で日々の変化が見えない、一日をなんとなく過ごしてしまった(指導計画を見ていない学生の実際の体験として)。伸びるものも伸びない。
⇒ 理由 1) 発達の見通しをつけるために必要	
学生の意見	ねらいのない活動になる。保育にならないで(2)、ただの預かりである。子どもの貴重な一日がもったいない。いきあたりばったりだ(2)。家庭とは違う集団保育なのだから、ななあになんてはいけない。ねらいは達成しない。ねらいがないと保育の質がよくなる。混乱する。何をしたら良いかわからない(2)。毎日同じことをすることになる。適当になる(2)。だらだらする(3)。
⇒ 理由 2) 保育にはねらいが必要である	
学生の意見	時間が押しがちになる。生活リズムが乱れる。右往左往して保育にならない。やりたいこともスムーズにできない(2)。行事に間に合わない。
⇒ 理由 3) タイムスケジュールとして必要	
学生の意見	危険防止(5)や配慮(2)、準備ができない(3)。
⇒ 理由 4) 準備や環境設定のために必要	